鮎川哲也

風の証言

鮎川哲也

風の証言

毎日新聞社

風の証言

鮎川哲也著

定価 560円

昭和46年11月25日印刷
昭和46年12月 5 日発行

編集人　浜田　琉司
発行人　朝居　正彦
印刷所　大日本印刷
製本所　大口　製本
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町

〈検印省略〉© 鮎川哲也　1971　0393-671900-7904

目

次

一　池畔の殺人　7
二　水彩画　21
三　城のある町で　38
四　アイスクリームと腕時計　62
五　濡れた足跡　90

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

六　虚像と実像の間　122
七　アリバイの構造　151
八　逆位相の時点　172
九　終章への傾斜　190
あとがき　216

装幀 I・B・D

風の証言

一　池畔の殺人

一

その日、猪狩と平林は出社する早々研究所長に呼ばれた。そろって来てくれというのである。班のなかで指導的な立場にいる二人が、首をならべて来いといわれるのは滅多にないことだった。しかも所長は、猪狩たちが出勤するのを待っていた気配がうかがわれた。

猪狩は茶をついだばかりの湯呑を、位置をえらんでそっと机においた。

「なんだろうな」

彼は平素の無愛想な表情をいっそう露骨にみせて、平林をかえりみた。猪狩のほうが三つ年長の三十三歳になる。入社したのも三年はやかった。

「わからんな」

と、平林はふとい頸を無理にねじると、相手を見た。

「企画会議はすんだばかりだし……」

「昇給の辞令でもでるんじゃないかな」

年長だけに猪狩は余裕をみせて冗談を言った。彼は背のたかい痩せた男で、多分に神経質なところのあるきまじめな性格の持主だった。愛想がないわけではないのだが、度のつよい近眼鏡をかけ、唇をぎゅっと結んだ顔は、どうみても胃病患者か、さもなければ救いがたいペシミストとしか思えなかった。

ふと気づくと、命令を伝えにきた女秘書は、まだ傍に立っていた。

「やあ、失敬。すぐ行きますと言ってくれないか」

「はい」

平林は、秘書の格好のいい脚の線を見送っていたが、われに還ったように立ち上がって身づくろいをした。研究所長は五十すぎの工学博士で、取締役でもあった。彼の部屋をたずねるとなると、やはりちょっとした緊張を感じるのである。

オメガ音響の研究所は、本社と別棟の二階建てで、研

究室は一階の全域を占めている。さらに研究室は七班にわかれ、それぞれが会社からあたえられた命題について設計、研究、実験をやるシステムだが、猪狩班が取り組んでいるテーマは光電管によるカートリッジの開発であった。理論は戦前からわかっていたのだけれど、各電機メイカーのことだからまだまだ改良の余地がある。性能その他について利用者から寄せられるさまざまな不平、不満、忠告を集計し、分析した上でさらに優れた製品を造るための研究をすることが、猪狩以下九名に課せられた使命なのだ。あたえられた期間は十五ヵ月である。だが、秀れたメンバーが揃っていることもあって研究は早いテンポで進み、月末にはレポートを上司に提出するところまで漕ぎつけていた。

班長と平林が出ていったあと、残った八人の技師たちは仕事が手につかぬという面持で私語をかわした。彼等は、所長が猪狩を呼びつけた理由を知っていたからである。班長と平林は、口ぐちに昇給辞令だの何のといってとぼけていたが、二人がつとめてあの一件に触れまいとしている気持もよくわかるのだった。

先頃の重役会議の席上で、常務のひとりが光電管カートリッジの将来性について否定的な発言をしたことがある。それは、ある音響評論家からの入れ知恵だったらしいのだが、地道に従来どおりのカートリッジを研究しつづけたほうが営業政策上有利ではないか、というのであった。彼に言わせると、光電管は、要するに一時の思いつきと変わりがなく、これに打ち込むのは道楽に血道をあげるようなもの、というのだった。そのときは、研究所長が強硬に反論したばかりか、社長も肩をもってくれたので、どうやら常務の提案は不発におわったのだが、社長が考えを変えて研究の打ち切りを決意し、所長にその意向を伝えるということもあり得ぬわけではない。そうだとすれば、完成を目前にひかえていながら一切の努力が無に帰してしまうのである。

「ああ、やりきれねえな、まったく」

と、一人が絶望的な声をあげた。

猪狩たちは、三十分ほどで戻ってきた。二人とも固い表情をしていることから、部下の誰もが予想のあたったことを直感した。タバコ好きの男は、火をつけたばかり

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

のハイライトを灰皿にこすりつけて坐りなおした。
「なんの話でした？」
「まあ、待ってくれ。いま、猪狩さんから説明がある」
べつにおもねるというのではないが、平林はいつも三年先輩の猪狩をたてていた。
猪狩は一つ頷くと、一同を自分の周囲に集めてから、声をしぼった。
「所長はお冠だったよ。われわれの研究結果の一部が、北海電機に盗まれたという情報が入ったからなんだ。つい先日、あの会社が発表した試作品のおひろめがあったんだ。ところが、そいつがうちで開発したやつに非常によく似ているというので、試聴会に招待された音響評論家がびっくりして所長に知らせた。さもなきゃ、まだ知らずにいるところだがね」
「なにかの間違いじゃないですか」
「情報の出所が確かだからな、間違いだとは思えない。秘密保持にはくれぐれも注意するよう要望された」
「盗まれたのはどの部分ですか？」
と、若い技師は、口ぐちに質問した。猪狩の言うことを信じれば、秘密を売った裏切者は十人のメンバーのなかにいることになるのだ。
「アダプターの回路だ。しかし、盗むのは容易だからな。早い話が、映画のなかのスパイがやるように、設計図をひろげてすばやくカメラのシャッターを切ればそれでOKだ」
「まさかそんな……」
音程のはずれた声になったのは、最年少の坂梨だった。小柄でとがった顎をした男だが、彼の特技は金庫のダイアルをあけることで、かつて面白半分にこのテクニックを披露して一同をあっといわせたことがある。そのときは座興としてすんだのだけれど、事態がこうなってくると、疑惑の目でみられるのは彼なのであった。
「まさか、ぼくがやったとは思わないでしょうね？」
「誰もそんなこと思っちゃいないさ。所長は、われわれのなかにスパイがいるんじゃないかと考えているらしいが、一概にそうとばかりは言えないからな」
と、猪狩は、無愛想な口調のなかにいたわりをこめて言った。

「こうしたケースは、大体の場合が、企画の段階で洩れることが多いんだ。音響評論家に茶飲み話のつもりで喋ってしまったことが相手側に伝わることもあるし、宣伝課の連中がPRを狙って雑誌社にながした話が向こうの会社のアイディアを刺激して、思わぬ製品ができてしまったこともある。しかし、今回の場合はそんなのではなくて、偶然の一致じゃないかと思うんだな。人間の考えることなんて似たりよったりのことが多いからね」

つとめて楽観的な意見を述べた。彼としては、チーム内に疑心暗鬼が生じて、その結果、能率のおちることを避けたかった。ひょっとすると、班のなかにスパイがいるかもしれぬという疑惑はあったが、つとめてそれは表面に出さなかったのである。

「今後は、二度とこうした不祥事が起こらぬよう厳重に注意してくれ、と所長が強調しておられた。これは、われわれの班ばかりでなく、宣伝課その他をふくめた全社員に対しての警告だ」

「ぼくからも繰り返して言っておきたいが、このことでチームの円満さが欠けるようになっては困る。みんなも以前と変わりなくやっていってほしい」

平林の短い話が終わると、一同は各自の席に戻った。が、そう言われてもなお、誰もが釈然としない面持で黙りこくっていた。タバコを吸うものは申し合わせたように一本ぬいて口にくわえ、思い思いのポーズでそれをふかしつづけた。偶然の一致というのはあり得ぬことではない。しかし、確率からいえば、それは微々たるものなのだ。班長がああ言ったにもかかわらず、全員がスパイの存在を肯定していた。苦労した共同研究がライバル会社の手にわたったことを考えると、なんとも不愉快でならなかった。

二

それから一ヵ月ちかく経過した初冬のことであった。すでに退社時刻は過ぎ、広い研究所のなかに残っているのは平林ひとりきりになっていた。平林は、この秋におそい結婚をする予定だったが、相手の女性がドイツの薬科大学に留学してしまい、挙式は当分の間お預けになっている。独身寮に住んでいる彼は、ほかの若い社員とは

違ってデートする相手もなく暇をもてあまし気味で、このところ、連日のように居残って仕事をしていた。

冷たい空気が顔をなでた気配に入口を見ると、そこに立っているのは帰った筈の猪狩だった。小さな骨ばった顔に黒縁の近眼鏡をかけ、例によって無愛想な表情をうかべている。気のせいか、今夜のそれは平素よりも一段と仏頂面にみえた。彼は、オーバーを着たまま近づいてくると、隣のイスに腰をおろした。

「忘れ物か？」

「違う」

猪狩は、怒ったように首をふった。そういえば、今日の彼は、朝から不機嫌だったな、と思った。あの一件がばれて、奥さんとの間に悶着があったのかもしれない。猪狩は、こうした辛気くさい男だから異性にもてるわけがなさそうなものだけれど、性格が誠実なために、いったん知り合った女性から妙に慕われたり、頼りにされたりする傾向があった。昨今も銀座のバーの雇われマダムと関係ができていて、ときどき泊まることもあるという噂が囁かれている。

「どうしたんだ、いったい？」

「それを話そうとして戻ったんだ。きみが残業していることは知っているからな」

猪狩は皮の手袋をとると、二つを重ねてきちんと机の上にのせた。

「仕事中は話す機会がなかったもんだからね。それに、この話は当分の間、きみの胸にしまっておいてもらいたいのだ」

言うことがなにやら大袈裟にすぎるように感じ、平林は応答にとまどって相手の顔を見つめるだけだった。だが、猪狩は、いつものとおり大まじめである。

「うちの研究が北海電機に盗まれたことだが、スパイの正体をこの目で見届けたよ」

「なんだって？」

「おれは、初めから班のなかにスパイがいるものと睨んでいたんだ。ところが、まったく偶然なことから、そいつが妙なやつと呑んでいる現場を目撃した」

落ち着いた、セーヴした口調で彼は語った。

「どこで？」

「八王子のキャバレーさ」
八王子は、東京の西のはずれに位置した織物の町である。土地の人間ならともかく、わざわざ東京から呑みにいくやつの気が知れない。
「ずいぶん土臭いキャバレーに行ったものだな」
「いや、おれもそのキャバレーに入ったんだ。大学時代の友人と会って、そいつに誘われたんだよ。八王子の大地主の息子でね、久し振りに痛飲しようということになって、まずそのキャバレーに行った。すると、少し離れた席に、うちの班のものが、見たこともない男とひどく親しそうに呑んでいる。ホステスを両脇に抱え込んで、ちょっとした豪遊だ」
「誰だい？」
と、平林は、当然な質問をした。彼は、先程とは別人のように熱心な顔つきになり、イスを九十度回転させて猪狩と向き合っていた。
「斜め後ろから見たんだし、黒のサングラスをかけていたから百パーセント当人だとは言い切れないんだが、九十九パーセントは間違いない」
「だから、誰なんだ？」
「わからんやつだな、一パーセントの誤差があると言ったじゃないか」
「確かめなかったのか？」
「ああ。おれも迷ったんだ。声をかけたら他人の空似だったということもあるからな。もう少し様子をみてやろうと考えて呑んでいると、うまい具合に侍っていたホステスがおれの横を通りかかった。いいチャンスだとばかり後を追いかけて、物陰で呼び止めたんだが、客の名をかるがるしく喋ってはいけないというのが、この店のきまりだそうで、教えてはくれなかった」
ポケットからタバコをとりだすと、平林にも一本すすめた。平林は、タバコを買うとそのままポケットに押し込むが、猪狩はきちんと七宝のシガレットケースに並べかえる。そうした点にも、この班長のきちんとした性格があらわれていた。
「そこで、バッジを見てやろうと考えた。といって、おれが覗くわけにはいかないから、友だちにたのんで手洗いにいくふりをしてちらっと見てもらったんだが、驚い

たことに二人ともバッジをはずしているんだよ。これでおれの疑惑は決定的になったね」
「そいつは確かに訝しいね」
と、平林は素直に同意した。このオメガ音響は、電機業界でも知られた存在であった。バーやキャバレーに行っても、バッジをつけているともて方が違う。初めて入った店でも、胸にオメガのバッジがついていれば、つけが効くとまでいわれている。その、霊験あらたかなバッジをはずしたとなると、周囲のものに身許が知られることを警戒していたものと解釈されるのだった。
「しかし、服を着替えたときにバッジをつけ忘れたんじゃないのかな」
「いや、相手の男もはずしているんだ」
「なにもきみの見方にたてつくわけじゃないけど、相手の男にしても、商人や農民や画家だったらバッジは持っていないだろうからね」
「……」
猪狩は、ちょっといやな顔をしたが、吸いかけたタバコを灰皿に捨てると挑むような言い方をした。
「おれは、きみと違ってお洒落だからな、ひとの服装にはよく気がつくほうだ。あの男が会社に着てきた服と、キャバレーで目撃したときの服が同じものであることは確かなんだ。だから、服を着替えたとするきみの意見には承服できないな。もっとも、彼がおなじ上着を二着持っていればべつだけど」
「ふむ」
「それから相手の男だが、これが百姓町人でないことは明白だよ。ホステスにあっさりことわられて引きさがるおれじゃないからね、ちょっと鼻薬をきかせてさ、せめて商売だけでも教えてくれと粘ったら、あのお客はどちらも電機関係の人間だというのだ」
「ばかなやつだな。頭かくしてなんとやらというが、いくら黒眼鏡で変装したって、ホステスに名刺をやったら意味がないじゃないか」
「そうじゃない。彼等は、それほどのばかじゃないよ。どのホステスもやるように、彼女も名刺をもらいたいと言ったら拒否されたそうだからね。女にせがまれれば、たいていの男は、鼻の下をのばして一も二もなく名刺を

わたしてしまうものだが、彼等に限ってそうはしなかったというんだ。おれが昨夜みたところでは、べつに道心堅固な男だという印象は受けなかった。逆に、ひどくでれでれした女誑しみたいなふうに思えたものだよ。その二人が名刺をわたさなかったというのは、彼等が自分たちの身許のわれるのをいかに警戒しているかってことになる」

「じゃ、どうしてホステスが電機関係の人間だってことを知ったのかね？」

「それがね、上手の手から水が洩るって諺のとおりなんだよ」

と言うと、めずらしく無愛想な顔をにやりとさせ、あたらしいタバコをくわえた。

「彼等は、ホステスなんてものは無教養で、無学なものときめてかかったんだな。それが失敗のもとになったわけだが、その前にこのホステスのことを言っておくと、彼女には子供があって、郷里の両親に預けてあるんだ。美人だからどう見ても子供がいるとは思えないけどね」

論理的なものの言い方をする彼も、相手が女性だと、非論理的になるらしい。

「それが、生まれながらのててなし児でちょっと可哀想な気もするんだが、この父親というのが秋葉原の電気商の店員とかいう極道者でね、女に赤ン坊が生まれたと知ったとたんに逃げ出して、今日に至るまで行方知れずなんだ。それで、捨てられた彼女は、止むなくホステスをして稼いでいるのだけど、この男が商売柄いろんな電機用語を喋っているのを、彼女が門前の小僧みたいに聞きかじって覚えてしまったんだ。だから、あの黒眼鏡たちが、デシベルだの、メガヘルツなんて話していたのを聞いて、電機関係の人間だなって見当をつけていたのだ」

「なるほどね。それにしても、キャバレーに来てまで仕事の話をしているなんて熱心な男どもだな、はは……」

平林は、腹をゆすって笑った。短軀のこの技師は、三十を越したばかりなのにもう下腹がつきでていた。

「待ってくれ。彼等は、昨晩初めて来た客じゃないんだよ。前々からの常連なのだ。その間にかわされた会話の蓄積のなかに、クロストークだの、歪率だの、イメージ妨害比なんていう専門語があったわけさ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc